

F-12 寝室配分にみる親子関係 お茶の水セ大家政 水島かほ江

目的 人生の3分の1を過ごす寝室で、誰れと誰れかどのように寝るかということは、家族関係を知る上で極めて重要な問題と思われる。このことに着目した研究は、過去にいくつが提出されているが、主に中小都市におけるものである。そこで、地域性の違い、また時間的変化をもつて、親子関係がどのように変化しているかを、寝室配分を中心にして、説明することにした。

方法 都市性の高いと思われる東京都区部の 10 市を寝室に対する住宅事情の制限が比較的弱く、従って寝室配分に対する意識がより明確にあると考えられる地域を選び、昭和50年2月13日より約2週間わたって、質問紙配布調査を行った。対象は、保育園、幼稚園、小学校、中学校の各生徒と子に持つ母親585人で、そのうち核家族で、かつ子供が3人までの世帯242を抽出し、過去の調査との比較を行った。

結果 子どもが小さいうちは、夫婦と子が同一寝室に寝る「合寝」が多いが、男女の性別とは独立に、6～9才の時期において、親から「分寝」が行はれおり、過去の研究に比べ、分寝年令が早まっていることが確認された。そして、3～6才で分寝するものがよいとする母親の意識と、実際の分寝年令6～9才との3才というずれは、住宅事情の好転によって埋められるであろうことが予測された。また3才以下の子どもの独寝が、過去の中小都市の調査に比べてふえていることの原因としては、調査地域の違いや、親子関係の変化が考えられ、このことについては、今後の調査で明らかにしたい。